

F E M I N A N O V E L S

阿波おどり 殺人事件

和久峻三

赤かぶ検事奮戦記



波踊り—徳島—

撮影
和久峻三



F E M I N A

阿波おどり殺人事件

一九九四年四月二十五日 初版発行

著 者 和久峻三

編集長 有働義彦

編集人 細川正博

発行人 高木俊雄

発行所 株式会社 学習研究社

東京都大田区上池台四―四〇―五
〒一四五

振替 東京八一―四二九三〇
電話 〇三―三七二六―八一二一 (代表)

印刷所 凸版印刷株式会社
製本所 誠和製本株式会社

©Shunzo Waku Printed in Japan
ISBN4-05-400318-4 C0393 168298

N O V E L S

FEMINA

NOVELS

**阿波おどり
殺人事件**

和久峻三

赤かぶ検事奮戦記

目次

第一章	渦潮の男	7
第二章	幽霊法廷	62
第三章	第二の妻	120
第四章	第三の妻	155

ブックデザイン 岡村元夫
カバーイラスト 藤田新策
本文イラスト 畑農照雄
口絵フォト 和久峻三

阿波おどり殺人事件

第一章 渦潮の男

1

「あら、すごいわね。これが鳴門の渦潮うずしおなの？」
テレビ画面を見つめていた長浜かおるは、一瞬、
息を呑んだ。

カメラマンの柳原和邦は、さも得意げに
「渦潮は、いつも、こんなふうに、大きくて激し
い渦を巻くんじゃないんだよ。大潮おしおのときでない
と、こんな渦は出ないのさ。昨日は大潮だったか
ら、そこを狙って撮影に出かけたんだよ」

「大潮って何？」

長浜かおるは、つぶらな瞳を柳原和邦に向ける。

そんな愛くるしい眼差しに会おうと、柳原和邦
は、どきまぎして胸が騒ぐ。

だが、柳原和邦は、ポーカーフェイスをくずさ
ずに

「大潮のときには、満潮と干潮の落差が一番大き
くなるんだよ」

「そのときに、鳴門海峡の渦潮も大きくなる。こ
ういうこと？」

「そのとおりだ。大潮は、毎月、ほぼ二回しか起
こらないから、渦潮を撮影するチャンスだって、
二回しかないってことなんだ」

「なぜ、二回なの？」

「なぜって？ ぼくは専門家じゃないから、うま
く説明できないけど……要するに、満月と新月の
ときに大潮が出るんだ」

「それじゃ、いつが満月で、いつが新月だなんて、

「どうやって調べるの？」

「新聞を見ればわかるよ。天気図の下に、月の満ち欠けが載っているのを見たことがあるだろう」

「わたし、天気図なんて見ないもの」

「暦こよみを見てもわかるんだ。海上保安庁が発行している『潮汐表』には、詳しく出ているさ」

「何だか知らないけど、調べればわかるってことね」

「そりゃわかるさ。この映像は、昨日の正午頃に撮影したんだ」

「昨日の正午が大潮だったの？」

「大潮で、しかも干潮だったんだ」

「それじゃ、いまビデオに映っている激しい渦潮は、潮が引いていくところを撮影したものなのね？」

「そうさ。鳴門海峡が干潮になると、反対側の明

石海峡では、満潮なんだよ。そんなわけで、淡路島を挟んで、干潮と満潮とが同時に起こると、このように大きく渦を巻くんだよ」

「何だか、むずかしそうね」

「そう言って、ちょっと小首を傾かしげる彼女の表情が、見るからに可愛い。」

柳原和邦は、いま、ここで彼女を力いっぱい抱きしめたい衝動に駆られながらも、じっと堪こらえていた。

「こういうとき焦ったりすると、ろくなことはない。」

何よりも、彼女に逃げられるのが怖かった。

「別に、むずかしいことじゃないんだよ、かおるちゃん。満潮のとき、紀伊水道を北上してきた潮の流れが、大阪湾を通り抜け、明石海峡に達する頃には、反対側の鳴門海峡では干潮になるんだよ。」

つまり、潮が引くわけさ。このように、淡路島の北側では、潮が満ちてきているのに、南側では、潮が引いていくという現象が起こる。これを南流と言つて、潮が南のほうへ流れていくわけだ。一方、紀伊水道を通して北上してくる満ち潮は、北流だ。北へ流れるからね。そんなわけで……」

「わかった」

と長浜かおるは、突然、パッと顔を輝かせて

「こうでしょう？ 南流の引き潮が、北流の満ち潮と鳴門海峡でぶつかり合う。だから、渦ができるんでしょう？」

「さすがだ。かおるちゃんは頭がいいね。確かに、そのとおりなんだよ」

と柳原和邦は、しきりに彼女を持ちあげた。

実際のところ、彼女の説明は間違っているが、いくぶん物足りない。

南へ流れる引き潮が鳴門海峡へ達すると、紀伊水道側から北上してくる潮の流れは、大阪湾へまわってしまうから、鳴門海峡では大きな潮位の差ができる。

その落差は、一メートル前後から、それ以上に及ぶこともある。

そのために、鳴門海峡では大きな渦ができるのだ。

もちろん、これには鳴門海峡の複雑な地形が大きく影響しているのも事実である。

「柳原さん。ちょっと聞いていい？」

長浜かおるは、柳原のほうへ少し身を寄せるようにしてたずねる。

半袖のブラウスから露になった彼女の肌が、柳原の腕に触れる。

生温かな肌の感触に、柳原は心臓を締めつけら

れるような気分になったが、何くわぬ顔をして

「何でも聞いてくれよ。たいていのことは答えられると思うから……」

「柳原さんはカメラマンでしょう。でも、いま、テレビに映っているのは、ビデオじゃない？ 写真は撮らなかったの？」

「両方とも持って行くんだよ。ビデオカメラと一眼レフカメラとを……撮影のときにはね。ビデオの映像だけを買ってくれるプロダクションだってあるんだから……」

「だけど、一度にビデオと写真が撮れるわけじゃないでしょう？」

「当たり前だよ。ビデオ向きの被写体もあるし、一眼レフカメラで撮ったほうが迫力のある場合だってあるんだから……」

「そのときの都合次第というわけ？」

「まあね」

と柳原和邦が答えたとき、テレビ画面の映像に、海水パンツ一枚の男の姿が映った。

それを見て、長浜がおるが小さく叫ぶ。

「何よ、あの人……海水パンツをはいたまま、下のほうへ降りて行くじゃない？ あら、飛び込んだじゃったわよ。鳴門海峡を泳いで渡るつもりかしら？」

「ぼくだって、これには度胆を抜かれたよ。大鳴門橋の橋脚までたどりつき、そこから渦潮の中へ飛び込んで、対岸の淡路島まで渡り切ろうというんだから……」

「無理よ、そんなの……渦に巻き込まれて、死んじゃうわ」

「そうなんだ。溺死するのがおちだから、やめろと言ったのに、ぼくの忠告を聞かないんだから

……」

「柳原さんの知っている人？」

「とんでもない。全然、知らない男だよ。経緯いきさつを話してあげよう。ぼくが鳴門山展望台にビデオカメラを据え、眼下に渦巻く鳴門の渦潮を録画していたときのことなんだ。そこは、大鳴門橋が一番よく見える場所だね。渦潮を撮影するにも、うってつけなんだよ」

「山の上なの？」

「ちょっと小高い山なんだけど、頂上までは、エスカレーターで登れる。全長六十七メートルだというから、ずいぶん長いエスカレーターだね。プラスチックの屋根がついているので、雨が降っても心配ない。実際、そのときは雨模様で、さすがに観光客の姿も見えなかったよ。プロカメラマンにとっては、絶好の撮影条件というわけさ。ぼく

のビデオカメラは、ずいぶん大型のやつで、テレビ局と間違えられたりしてさ。撮影中にも、人が寄ってきて、何だかんだと話しかけてくるんだ。そういうことをされると気が散って、撮影に集中できないんだ」

「それで、どうなったの？」

「渦潮と言うのは、瞬間的にあらわれ、すぐ消えるんだ。いつまでも渦を巻いているわけじゃない」

「まあ。知らなかったわ。ずっと渦が海面にあらわれているんだとばかり思っていたのに……」

「それなら撮影しやすいんだけど、そうもいかなから……何と言うかな、神出鬼没なんだ。渦があらわれたと思ったら、間もなく消える。その途端に、少し離れたところに、また渦があらわれるといった調子でね」

「だったら、カメラをあっちに向けたり、こっちに向けたりしなくてはならないわね？」

「いや、そうでもない。渦のあらわれるところは、大鳴門橋の下のあたりで、およその位置もわかっているんだ。観潮船の事務所でも教えてくれるよ、どのあたりに渦が出るかってことをね」

「柳原さんがビデオを撮っていたときにも、観潮船が出航していたの？」

「渦の出そうな場所をひとまわりして、渦が出た途端に、少し離れたところに、しばらく止まっていたよ。でも、大きな貨物船がやってきたもので、早いうちに切りあげ、港へ退避したようだ。貨物船が通り過ぎるのを待って、もう一度、渦の出そうなところへ出航するつもりでいたのかもしれないけど、ぼくは、そこまで見ていない。その男に気をとられていたから……」

「その人、結局、どうなったの？」

「死体は上がらなかったけど、溺死したよ。ひよっとしたら、入水自殺するつもりでいたんじゃないかと思うんだけど……そこらへんのことは何とも言えないよ」

「ヘンな人。頭がおかしいんじゃないかしら？」

「さあね。ことの発端は、こうだ。ぼくがビデオカメラで渦潮を撮影していると、その男が傍へ寄ってきて、こう言うんだ。『先程から、ずっとあんたを見ていたが、正直な人のようだから、お願いたしたい。おれは、渦潮の中へ飛び込み、無事に泳ぎ切って見せる。大丈夫だ。死にはしないから……こんなことをするのは初めてだが、いつかは挑戦してみたいと思っているんだよ。今日がその日だね。気分も最高だし、体調もいい。必ず成功するよ。あんたのビデオカメラで、その様子を撮



影してもらいたい。ただし、ビデオテープはいただくよ。もちろん、金は出さず。見たところ、あんたはプロのようだから、きつとうまく撮ってくれるだろう。期待しているよ」なんて言ったもんだから、ぼくはびっくりしたよ。いずれにしても、その男の服装を見ると、驚いたことに、ちゃんと用意ができているんだ」

「海水パンツ一枚だったの？」

そう言って、長浜かおるは、くすつと笑う。

「海水パンツのうえから、アロハシャツみたいなのを着ていたよ。靴をはかずに、サンダル履きだったね」

「それじゃ、最初から、海へ飛び込むつもりだったのね？」

「そうだ。こんなことも言っていたよ。『万一にも、おれが渦に吞まれて死んじまっても、一切、

かまわなくてももらいたい。どうせ、おれは一人ぼっちなんだから……もう、こんな変な世の中にはうんざりだ。死んだっていいんだよ。だけど、おれが海面へ浮かんでこなかった場合、ビデオテープは公表しないでほしい。マスコミやら世間の連中の物笑いになるのは嫌だからね。勝手なお願いかもしれないが、聞いてくれるよな。それから、これをきみに預けておく』と言って、男は、ポシエットみたいなものをぼくに預けると、すたすたと鳴門山展望台を降りて行くんだ。ぼくは、あつけにとられて見送っていたよ。冗談かもしれないと思ったりして……」

「柳原さんの見た感じでは、どんな人だったの？」

「そうだね。年齢は、三十代の後半かな。中肉中背で、がっちり引き締まった逞し^{たくま}そうな体をし